

実機正方形ステンレス製パネルタンクのスロッシング挙動の把握

Research on Sloshing Phenomenon in Square Panel Tank made by Stainless Steel

遠田 豊 (中大・理工) 井田 剛史 (榊十川ゴム) 平野 廣和 (中大・総合政策) 佐藤 尚次 (中大・理工)
 Yutaka ENDA, Chuo-University
 Tsuyoshi IDA, TOGAWA RUBBER CO.,LTD.
 Hirokazu HIRANO, Chuo-University
 Naotsugu SATO, Chuo-University
 FAX:03-3817-1803, E-mail y-enda@civil.chuo-u.ac.jp

The sloshing phenomenon caused by long-period earthquake ground motions has been observed repeatedly in recent years. Overflow of liquid in water tanks often takes place. Damages of water tanks by the East Japan Earthquake of 2011 are the most recent example. In contrast to circular tanks, rectangular tanks show direction-dependent response behavior. In this paper, shaking experiment was conducted to make this sloshing phenomenon in square panel tank made by stainless steel clear. Experimental results suggest this tank sloshing phenomenon.

1. はじめに

我国では、数秒から数十秒のやや長周期地震動による各種の地震被害が懸念されている¹⁾。その一例として、2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震(M9.0)において、被害地域内の上水道配水施設での矩形タンクの破損被害や、震源から遠く離れた地方においても正方形タンクの破壊被害が多数報告された。東日本大震災ではこのように貯水タンクの被害により病院、学校等の一次避難所でライフラインである水が十分に配給されず甚大な被害をもたらした。

このような種のタンク被害は、やや長周期地震動によりスロッシング現象(液面揺動の励起)の発生によるものと推定されている。これらの背景から、矩形断面容器におけるスロッシング挙動の把握ならびに対策の検討が必要とされている。

これを受けて本論では、実機正方形ステンレス製パネル式タンクを用いて、加振方向角の変化がスロッシング挙動に与える影響に関して検討を行ったので、ここで報告する。

2. 実験概要

Fig.1 に示す正方形断面の各辺 3000mm のステンレス製パネル式タンク(以下、タンク)に 2700mm まで水道水を満たし、加振実験を行う。このタンクは、実際に上水の貯水に用いられるものと同一の仕様である。加振実験には、愛知工業大学所有の振動装置を用いる。

応答波高の計測には、レーザー変位計(以下、変位計)を 1~4 の 4 台用い、Fig.2 に示す様にタンクの上面に設置する。変位計の設置位置の狙いは、変位計 1 は隅角部での波高、変位計 3 は壁面付近での波高、変位計 2, 4 は 2 次モードでの腹(山と谷)になる部分の波高を把握するために設置した。また、タンク内部のスロッシング挙動を把握するために、Fig.2 に示す様にタンクの中から壁面方向と隅角部方向を web カメラで撮影する。図-3 に実験全体の状況を示す。

一般に、スロッシング発生時に応答波高が最も大きくなるのは、入力振動数とスロッシング固有振動数が一致して共振した場合である。そのため、矩形水槽のスロッシング n 次モード振動数を式(1)の理論式²⁾で表すことが出来る。

$$f = \frac{1}{2\pi} \cdot \sqrt{\frac{(2n-1) \cdot \pi \cdot g}{L} \cdot \tanh\left(\frac{(2n-1) \cdot \pi \cdot H}{L}\right)} \quad (1)$$

ここで、 f はスロッシング固有振動数、 g は重力加速度、 L

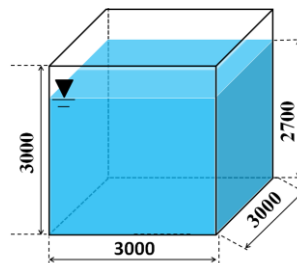


Fig.1 Dimensions of the Tank

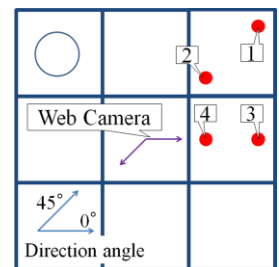


Fig.2 Setting position of the metering equipment

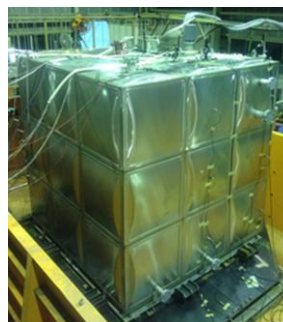


Fig.3 The situation of the Experiment

Table 1 Theoretical value of the number of vibrations of the Sloshing

water depth [mm]	2700
Width of the container [mm]	3000
1st [Hz]	0.50
2nd [Hz]	0.88

Table 2 Experiment condition

	Condition of the Wave	Input number of Vibrations[Hz]	Stroke [mm]	Experiment time[s]
1st	Sine-Wave	0.47~ 0.52	±3.0	10
2nd		0.86~ 0.88		

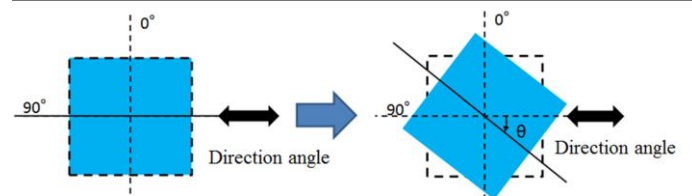


Fig.4 Setting method of the direction angle

は容器の幅、 H は水深である。式(1)より、実験で用いるタンクのスロッシング 1 次、2 次モード振動数の理論値は、Table 1 に示すようにそれぞれ 0.50Hz、0.88Hz となる。

そこで本研究では、1 次モードは 0.47~0.52Hz、2 次モード 0.86~0.88Hz の範囲において、入力振動数を 0.01Hz 刻み

で変化させながら加振実験を行うことで、実験に用いるタンクのスロッシング固有振動数の把握を行う。また、スロッシング挙動により内容液がタンクの天井に当たることで減衰が付加されてしまうことを防ぐために、いずれ振動数においても振幅は±3.0mm、設定加振時間は10sと統一する。加振装置の設定条件の緒元を Table 2 に示す。

また、正方形断面容器は、加振方向角が変化することで、応答波高が著しく増大する特徴がある³⁾。そこで本実験においてもタンクを加振する方向角 θ を Fig.4 の様に定義し、 $\theta=0^\circ\sim 45^\circ$ の間で設定する。そして、加振方向角を 15° 間隔で設定し、加振方向角を変化させながら加振実験を行い、最大波高等を計測してスロッシング挙動の違いを調べる。

3. 実験結果

3.1 スロッシング固有振動数の確認

Fig.5 の(a)に1次モード、(b)に2次モードの各加振方向角における入力振動数と最大波高の関係を示す。最大波高の値は、いずれの加振方向角においても最大の値を示した変位計の値を用いた。

Fig.5 より、いずれの加振方向角においても1次モードでは0.49Hz、2次モードでは0.87Hzにおいて最大波高が卓越している。タンクの1次、2次モードの理論値はそれぞれ0.50Hz、0.88Hzであるので、タンクのスロッシング固有振動数は理論値とほぼ一致している。

3.2 1次モードの検討 (0.49Hz 加振)

Fig.6 に1次モード0.49Hz加振の各加振方向角における最大波高と減衰定数の関係を示す。最大波高の値は、いずれの加振方向角においても最大の値を示した変位計の値を用いた。

Fig.6 より、1次モードでは、加振方向角を増加させていくと徐々に最大波高が増大し、加振方向角 45° の場合に最大波高が247mmとなり、加振方向角 0° の場合の最大波高169mmと比べて、最大波高が約45%増加している。これは加振方向角の変化により実タンクの隅角部に内容液が集中した結果、最大波高が大きくなったと考えられる。また、著者らのこれまでの実験の結果から、加振方向角が 45° を超えると最大波高が徐々に減少していき、加振方向角が 90° の場合には加振方向角 0° の場合と同等の値になると考えられる³⁾。

一方、減衰定数に関しては、加振方向角に依存せず0.0045~0.0055 とほぼ一定の値を示した。

3.2 2次モードの検討 (0.87Hz 加振)

Fig.7 に2次モード0.87Hz加振の各加振方向角における最大波高と減衰定数の関係を示す。最大波高の値は、いずれの加振方向角においても最大の値を示した変位計の値を用いた。

Fig.7 より、2次モードの場合には、1次モードの様に加振方向角の変化が加振方向角の増加に顕著に繋がらなかったが、加振方向角 45° の場合に最大波高が194mmと最大の値をとっている。

減衰定数に関しては、1次モードと同様に加振方向角に依存せず、0.001~0.002 とほぼ一定の値を示した。加振実験より、一度共振するとなかなか減衰せず、約20分間スロッシング挙動が継続することを確認した。

また、webカメラのタンク内部の映像より、いずれの加振方向角においても砕波が生じ、内容液が回転している挙動を確認することをした。以上から、加振方向角が変化しても最大波高が200mm以上にならない原因には、いずれの加振方向角においても砕波が生じることが挙げられる。

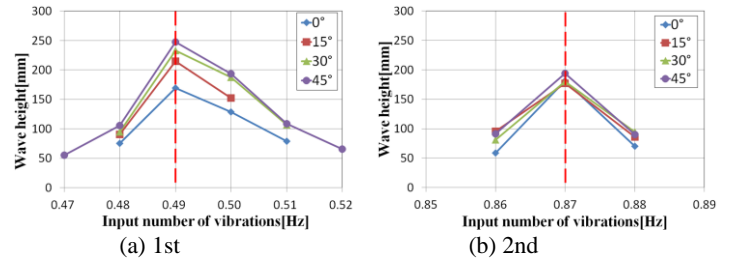


Fig.5 Relations of input number of vibrations and the wave height

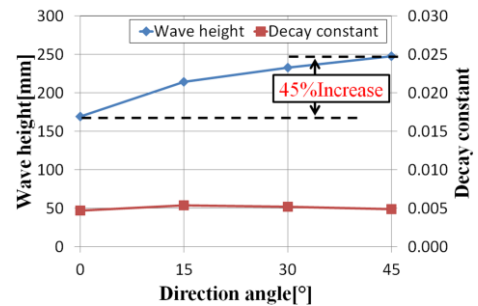


Fig.6 Wave height and Decay constant in each Direction angle in the 1st

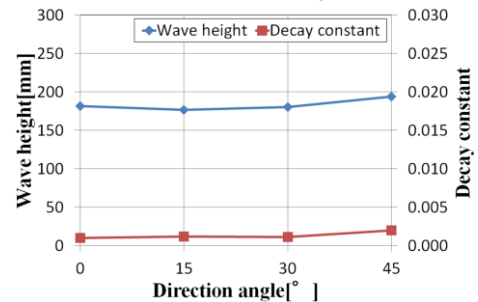


Fig.7 Wave height and Decay constant in each Direction angle in the 2nd

4. おわりに

本論では、実際に上水の貯水に用いられている正方形の3000mm角のステンレス製パネル式タンクを用いて、加振方向角を変化させながら加振実験を行った。

タンクのスロッシング固有振動数は、理論値とほぼ一致することを確認した。

1次モードでは、加振方向角 45° の場合に隅角部に集中的に波高が大きくなり、最大波高が 0° と比較し約45%大きな値となった。2次モードでは、加振方向角の変化が応答波高の増大に顕著に繋がらなかったが、いずれの加振方向角においても砕波が生じ、内容液が回転している挙動を示した。

また、減衰定数は、モード形状や加振方向角に関わらずほぼ一定の小さい値となった。特に2次モードでは、一度共振するとなかなか減衰せず、約20分間スロッシング挙動が継続した。

今後は、スロッシング挙動による動的な作用におけるタンクの性能限界を把握するために、破壊実験を行う予定である。

参考文献

- 1) 酒井理哉, 東貞成, 佐藤清隆, 田中伸和: 溢流を伴う矩形水槽の非線形スロッシング評価, 構造工学論文集 vol. 53, 2007. 3.
- 2) 葉山真治, 有賀敬治, 渡辺辰郎: 長方形容器におけるスロッシングの非線形応答, 日本機械学会論文集, 49巻437号, 1983. 1.
- 3) 遠田豊, 井田剛史, 平野廣和, 佐藤尚次: 矩形断面容器において加振方向角を変化させた場合のスロッシング現象, 応用力学論文集, vol. 15, 2012. 8.